

# QOL

Quality Of Life

QOL  
サポーター  
新潟

39

2015年12月10日発行  
新潟医療福祉大学広報委員会編集



フィリピンからの留学生を交えてのグループワーク/連携総合ゼミ  
9月7日(月)~11日(金)、連携教育の一環として「連携総合ゼミ」が開催され、学科、大学、さらには国の垣根を越えて、チーム医療・チームアプローチについて実践的に学びました。

- Index
- 特集「世界の中の新潟医療福祉大学」
  - 平成27年度「連携総合ゼミ」開催報告
  - 学外実習体験記
  - 「第15回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
  - 大学院生研究紹介
  - 卒業生レポート
  - CAMPUS NEWS
  - 伍桃祭を終えて
  - 受験生のみなさんへ



新潟医療福祉大学



本学では、保健・医療・福祉・スポーツ領域で国際的に活躍できるグローバル人材を育成し、これらの領域において、アジアでの国際交流拠点を目指しています。そのため、アジアにおける保健・医療・福祉・スポーツ領域の人材育成・学術交流を行うとともに、国際貢献・国際協力を積極的に行っています。

その活動の一つとして、8月24日(月)～9月4日(金)の2週間にわたり、台湾から8名の医療関係者が来学し行われた「義肢装具教育プログラム」について、義肢装具自立支援学科長 東江 由起夫教授に、プログラムの内容や今後の展望について伺いました。

interview

## 新潟医療福祉大学・台北榮民總醫院 学術交流 「義肢装具教育プログラム」



義肢装具自立支援学科長／教授  
東江 由起夫

### Q 本学で行われるに至った経緯についてお聞かせください。

義肢装具自立支援学科は、本学の将来計画に基づき義肢装具分野での“アジア”を目指しています。その計画のもと、平成24年度より学長裁量研究「義肢装具自立支援学科・分野で実施している海外研究者を対象としたトレーニングセンターに関する研究」に取り組んでいます。初年度の研究結果から、アジアにおいて本学が秀でた地位を確立するためには、未だ義肢装具士の国家資格が設立されていない台湾に、義肢装具士国家資格の設立および義肢装具士教育機関の創設への支援があげられました。そのことを通して、世界ではじめて義肢装具士教育カリキュラムに福祉用具専門職カリキュラムを取り入れ、高齢社会における福祉用具の知識をもった義肢装具士を育成していることを、これから高齢社会を迎えつつあるアジア諸国に発信し本学の知名度を高めます。そして本学の義肢装具士教育が、時代の最先端にあることを世界に示します。

そこで本学では、平成25年8月1日(木)、台湾からの留学生で本学科第一期卒業生の劉 文隆(りゅう ぶんりゅう)さんが勤務する国立の台北榮民總醫院と、義肢装具および福祉用具の分野における教育、研究、臨床に関する双方の発展のために、学術交流協定を締結しました。台北榮民總醫院は、台湾



学術協定調印式

では唯一、国の基幹病院として義肢装具製作部門と福祉用具部門をもっており、また台湾の厚生労働省の管轄にあることから、今後、こうした学術交流を通して台湾における義肢装具士の国家資格の設立ならびに教育機関の創設に向けた支援活動を展開することにしました。

### Q プログラム内容や研修の様子についてお聞かせください。

台北榮民總醫院 学術交流「義肢装具教育プログラム」の目的は、前記のように台湾における義肢装具士国家資格設立と義肢装具士教育機関の創設にあります。そのためには、台湾の義肢装具の製作適合に携わる方々(製作技術者)の技術の向上、義肢装具士国家資格の設立および、義肢装具士教育機関の創設への理解といった課題を解決する必要があります。また今後、教育機関ができた際の教員の育成も求められています。そこで本学科では、これらの課題を解決するための方策として、平成26年度より「義肢装具教育プログラム」を実施しています。

その内容は、本学科のカリキュラムの義肢分野ならびに装具分野の専門専攻科目と同じプログラムを短期間で実施するものです。また、大学さながらの小テスト、最終試験などを実施し、合格した者に対して修了証書を渡すことにしています。平成26年度は、8月25日(月)から9月12日(金)までの3週間に、本学から台北榮民總醫院に教員を派遣し、義肢学Ⅲ／義肢学実習Ⅲ(大腿義足の理論と製作適合実習)を実施しました。研修生は当醫院の2名の技術者と、台湾各地から集まった計7名が参加しました。全体の運営ならびに通訳に

は一期生の劉さんと本学留学生の蔡 昀真(さい いんしん)さんが担当しました。本年度は8月24日(月)～9月4日(金)の2週間にわたり、台湾から8名(男7名、女1名)の研修生を本学に招き、学科教員一丸となって義肢学Ⅱ／義肢学実習Ⅱ(下腿義足の理論と製作適合実習)を実施しました。



下腿切断者の義足の適合

研修生は、初めて受ける大学での義肢装具士教育で、解剖学、運動学、バイオメカニクス、採寸・採型学、適合学などの知識が義肢装具の製作適合には必要不可欠であることを認識し、台湾における義肢装具士の国家資格と教育機関の必要性を強く感じていました。また、今後もこのプログラムを続けてほしいとの意見でした。

### Q 今後の展望についてお聞かせください。

今後も引き続き、台北榮民總醫院との教育・研究・臨床における学術交流を通して本プログラムを実施し、台湾における義肢装具の技術レベルの向上と、義肢装具士国家資格の設立ならびに教育機関の創設制度の確立を支援

する予定です。そのことで、本学のアジアにおける地位を確立する足掛かりとしていきたいと考えています。

# 国際貢献の最前線

本学では、国際貢献活動を研究・教育の両面で充実させ、在学生がこれからの保健・医療・福祉・スポーツの分野で、豊かな感性と幅広い視野を身に付けられるよう積極的に国際貢献活動を推進しています。その活動の一部をご紹介します。

## 青年海外協力隊等プログラム

本プログラムの大学院生は、修士課程に在籍しながら青年海外協力隊等の隊員として派遣国で活動します。現地活動中も指導教員および本研究科教員の指導を受けることができ、国際協力現場での実践を通じて、国際保健協力に関わる人材としての資質・能力を高めることを目的としています。

### 喜怒哀楽に満ちた2年間を、これからボランティア活動をされる方達と共有したい



保健学専攻 理学療法学分野1年 渡邊 司

「あなたが来てくれて私たち本当に感謝しているのよ。」これは、現地で活動する中で患者様からいただいた言葉です。

世界中には十分なリハビリを受けられず、医療制度や環境によって可能性の芽を摘み取られている人が多く存在します。私も新人の時からこのような話を聞いており、自然と世界の現状に興味を持ちました。「百聞は一見に如かず」の精神で、青年海外協力隊に参加したのが臨床経験3年を過ぎた頃でした。

コスタリカでの活動では、多くのリハビリ難民に出会いました。脳卒中を患い寝たきりとなり、老老介護をしている夫婦。私に泣きながら現状を訴えてきたのを覚えています。大腿骨頸部骨折で手術をしたはずの患者様。レントゲンを依頼し確認すると大腿骨頭がありませんでした。太陽にレントゲンをかざしながら家族へ説明した日の憤りを今でも覚えています。

「百聞は一見に如かず」には、後世に「百見は一考に如かず、百考は一行に如

かず」と続きができたそうですが、私は現地で活動することを通して、これまで受動的に接してきた世界が能動的に情報を得るものへと変わり、「百見は一考に如かず、百考は一行に如かず」のように多くの考えを実行しました。結果として、多くの患者様から冒頭に書いたような有難い感謝のお言葉をいただくことが出来ました。

ところで、「百考は一行に如かず」にはもう一つ続きがあります。それは「百行は一果に如かず」です。今何もしなければ時間の経過とともに私の活動は忘れられていくことでしょう。私は、自分の経験をこれからボランティア活動に参加する人たちに活かして欲しいと考えています。そのために、現在は青年海外協力隊等プログラムに参加し、活動を論文にまとめる作業に取り掛かっています。

私にとってコスタリカで過ごした2年間は、喜怒哀楽に満ちた何ものにも代えがたい素晴らしい経験となりました。



診療所での活動

## 空飛ぶ車いすサークル

### 車いすと心を届けるプロジェクト



タイでのボランティア活動

空飛ぶ車いすサークル (Flying Wheelchair Supporters: 以下FWS) は、公益財団法人日本社会福祉弘済会が主管となり進めている「空飛ぶ車いすプロジェクト」に参加しています。この活動は、一

般の家庭や病院、施設等で使用されなくなった車いすを回収・修理し、東南アジアをはじめとする発展途上国に届ける活動です。そしてFWSでは、前記した活動に加え、プロジェクトに参加する団体の中で唯一の医療福祉系の大学として、シーティングや介助方法の伝達も行っています。また、普段の学内活動では、車いすの修理方法やシーティング・介助法等について学習会を行い、さらに、医療従事者を目指すものとして車いすの身体への調整や使用法の伝達も

行っています。

私たちが車いすの修理活動やシーティング・介助方法の伝達を行う際に常に念頭においていることが、利用者様のQOLの向上です。私たちが行う作業は臨床で行われるような高水準のものではありません。しかし、発展途上国において車いすは大変貴重なうえ、その修理技術やシーティング技術は確立されていません。FWSは、常に利用者様のことを考え、自分たちが提供できる限りの最高の技術を提供しています。空飛ぶ車いすプロジェクトは、私たちの心と車いすを現地へ送るだけでなく、その修理・調整方法を学ぶとともに、実際の利用者様を相手に車いすの選択・適合を学ぶ貴重な機会ともなっています。今後もこの活動を通して、プロジェクトを広めていきたいです。



現地の小学生と修理活動

## Topic

### JICAの生活習慣病に関する研修コース実施機関として本学が選定!

本学では、保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、生活習慣病予防に不可欠な「看護」「栄養管理」「運動指導」「リハビリテーション」のすべてに関する教育・研修を実施していることから、平成21年度よりJICA受託事業として海外からの研修員の受け入れおよび学内外での研修を行っています。今年度もJICAの生活習慣病に関する研修コース実施機関として採択され、平成27年10月22日(木)～11月4日(水)にわたり、タイ王国より14名の研修員を受け入れ「生活習慣病予防コース」が実施されました。研修では、タイ王国の生

活習慣病の現状についてプレゼンテーションを行う「カントリーレポート発表会」や栄養・スポーツ・看護領域における講義・実習の実施、また、文化交流体験としてティーセレモニーへの参加や一日市内観光ツアーなどが実施され交流を深めました。



# 「連携総合ゼミ」開催報告

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

ゼミでは、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。

本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟薬科大学、日本歯科大学新潟短期大学、新潟リハビリテーション大学、フィリピンのアンヘルズ大学、サントトマス大学の学生がチームの一員として加わり、国際的な視野が広がるなど、さらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

連携総合ゼミの流れ

①自己学習を行い自身が担当する専門職を理解

②自己学習の成果をグループ内で発表し他の専門職を理解

③各専門職の立場から意見を出し合い支援策を共有

④協働して最善となる具体的な支援プランを作成

⑤パワーポイントを使用して研究成果をグループ発表

Report.1

## 私も町のような人になりたい(精神領域)

看護学科 准教授 西川 薫

### ▶ お互いを尊重しつつ真摯に支援を考える

事例に登場するAさんは、精神遅滞と統合失調症を併せ持ちながら精神科病院に入院している女性です。週に3回ほど院外へ仕事に行っていますが、怒りっぽいことから、周りの患者さんとよくトラブルを起こしていました。しかしあるとき、リカちゃん人形を1体購入し、リカちゃん人形の妹・両親を集め始めたことから、急に「私も町のような人になりたい」と看護師に伝えてきたのです。丁度このころからAさんは、精神状態も落ち着いてきました。

「さて、この患者様の退院までの3ヶ月間に、どのような支援が必要でしょうか、多職種で考えましょう」というのがこのグループの課題です。学生たちは、患者理解とアセスメントを重ね、退院までの3ヶ月間に必要な支援を考えました。

学生たちはまず、患者理解を丁寧に行うことで合意しました。「なぜリカちゃん人形をきっかけに町のような人になりたいと思ったのか」、「町のような人」とはどのような人なのか、「どのような生活を希望しているのか」について検討を重ねました。次に、多角的な視点

(精神症状、日常生活動作、知的能力、発達段階課題など)から各専門領域で用いるアセスメントツールを紹介し合いながらディスカッションを進めていきました。学生たちは、若干の緊張と遠慮を交えながらも、それぞれの考えを率直に言葉にしていたように思います。また、精神の障害を持つ人への援助は“問題点”を抽出するのではなく、むしろ“今持っている力”に焦点を当てることが重要となります。学生たちは、Aさんの問題点にフォーカスするのではなく、しっかりと健康的な部分に焦点を当てて支援策を考えていました。

参加した学生たちは、相手の意見を否定することなく聞き、良い点を褒め、取り入れるという態度を持っていました。Aさんに対する具体的な支援策の立案はもちろんですが、多職種間連携で最も大切な“お互いを尊重しつつ、専門的な観点から率直に述べ合い、真摯に支援策を考え続ける姿勢”は最後まで変わることなく貫かれていたと思います。

メンバー全員がお互いを尊重しながらともに成長している様子が伝わってきました。学生のみなさん、お疲れ様でした。



### 参加学生からの感想・コメント



連携総合ゼミに参加して、他分野を知るだけでなく自分の分野の専門性を改めて考えるきっかけとなりました。また、事例検討を通して医療制度の可能性と限界の両方を知れたことが大きな学びです。(看護学科 広井 葉澄)



それぞれの専門職の特色や注目点をはっきりと見えることで、はじめてチームとしての支援を考えることができるのだと感じました。自分の専門以外の視点を持てたことは、今後社会でも活かせる経験になりました。(言語聴覚学科 山崎 大智)



事例の検討を通して、患者様に対して、能力を引き出すような支援を考えることの難しさややりがいを強く感じました。また、他の職種ではどのように患者様にアプローチするのかなども学ぶことができ、とても良い経験になりました。(健康栄養学科 後藤 綾乃)



今回連携総合ゼミを通して、他学科の学生と一人の患者様について考える活動を行い、連携の大切さを知ると共に、他職種の役割を理解することができました。今回学んだことを将来に活かしていきたいと思っています。(作業療法学科 目黒 貴大)

# 開発途上国における障害のある人たちのための 地域に根ざしたリハビリテーション

理学療法学科 准教授 古西 勇

## ▶ フィリピンの大学と連携して

英語が苦手と思っている学生も、英語で考えて表現することがどうしても必要になったときには、それを何とか乗り越えるものです。毎年、このテーマで留学生とともに連携総合ゼミを行っています。今年には本学の6名の学生と、フィリピンのアンヘレス大学から2名、サントトマス大学から6名の計8名の留学生が2つのグループに分かれて連携総合ゼミに参加し、フィリピンの地域に住む障害のある方への支援策を一緒に考えました。具体的な事例としては、アンヘレス大学の学生と下肢を切断した患者様の事例、サントトマス大学の学生と脳卒中の後遺症のある患者様の事例を検討しました。

フィリピンの学生たちは、英語が公用語の一つでもあり、大学の授業はほとんど英語で行われていることから、英語を話すのが得意で

す。彼らから刺激を受けて、本学の学生たちも今回の連携総合ゼミを通じて、英語を使ってコミュニケーションを取ることの楽しさを学んでもらえたと思います。

最終日には、フィリピンの大学と本学の学生たちが一緒に作り上げた発表用のパワーポイントを使って、堂々と発表していました。フィリピンの学生たちも、いくらかの日本語を覚えて、英語と日本語で発表し、会場から拍手をもらいました。

フィリピンの学生たちは、新潟に滞在中のプライベートな時間でも、本学の他の学生たちと一緒に、和やかに楽しく過ごせたようです。

本学では、新入生は入学時に「私の夢」という作文を大学に提出しますが、今回のゼミに参加した学生たちが、フィリピンの学生たちとの交流をきっかけに、夢をさらに膨らませて社会に出てくれることを願います。



## 参加学生からの感想・コメント



連携総合ゼミの魅力は、国籍や学科関係なく、幅広い交流やディスカッションを行うことができることです。また、グループの成果を聴衆の前で伝えられたことも大変貴重な経験となりました。(理学療法学科 立木 翔太)



海外でチーム医療を学ぶ学生とディスカッションする機会は、私の視野を広げて国内外双方への関心を高めてくれました。将来は国際的な活動を通して、医療分野に貢献できる人になりたいと思います。(義肢装具自立支援学科 川上 裕之)



The IPE seminar was fun, informative, and was able to cover diverse fields in the aspect of medical profession. (連携総合ゼミは、楽しく、有益で、医療の専門職の面において多様な分野をカバーすることができました。)  
(アンヘレス大学 理学療法学科 Shane Alyssa R. Aquino)



The IPE seminar is tantamount to a celebration and in sync with being instructive and informative. (連携総合ゼミは、啓発的でとてもためになる行事でした。)(アンヘレス大学 作業療法学科 Irishfel Cyrille V. Guanlao)

## 平成27年度 連携総合ゼミ事例一覧

- 脳性まひ(疑い)児と育児不安を持つ母への成長・発達支援
- 脳卒中片麻痺者の自宅での生活
- 中高年者のメタボリックシンドロームの改善
- 高齢者糖尿病合併症の支援策
- 筋萎縮性側索硬化症(ALS)ケースの在宅療養実現への支援
- 重度四肢まひ者の家族復帰支援
- 大阪市における小学生虐待死事例の検証
- 高齢者の骨折予防・治療と生活支援
- 切迫早産・妊娠高血圧症候群で入院が必要となった妊婦への援助
- 高齢者への投薬



# 学外実習 体験記

本学では今年度、全11学科で学外実習を行いました。各専門職として高い実践力を身につけることを目標とした学外実習の成果を報告します。

## 実習を通して得た貴重な経験

私は、9月28日から10月16日まで新潟市西区にある信楽園病院にて評価実習をさせていただきました。今回の実習では、患者様への評価や訓練・臨床の見学など、貴重な経験を数多くさせていただきました。



言語聴覚学科 3年  
細井 美希

評価・訓練を実践し、知識や技術を多く学ぶ中で、その大変さや難しさを痛感しましたが、それ以上に臨床の中にある喜びや素晴らしさを実感しました。また、患者様のできることが増えていく場面に直面することで、患者様とともに喜びを感じるだけでなく、患者様との心の繋がりがも実感することができました。

3週間という短い期間ではありましたが、心が動かされるような貴重な経験を数多くさせていただき、言語聴覚士という職業の素晴らしさを身にしみて感じました。

今回の実習での貴重な経験やその中で抱いた感情を忘れず、言語聴覚士になるためにさらに努力を重ねていきたいと思っております。

## 個人の生活に合わせたリハビリ

9月28日から3週間、長野県にある信州大学医学部附属病院で行った評価実習では、技術面・知識面で多くのことを学ぶことができました。



理学療法学科 3年  
大塚 遼平

その中で私が一番学んだことは、「患者様が日常生活に復帰するまでのリハビリを考えることが必要」ということです。低下している機能をただ単に改善するリハビリを行うだけではなく、本人がどのような生活を送っていて今後どのような生活を望んでいるのかを知り、その生活へ復帰するためのリハビリを行うことが非常に大切であると改めて感じました。そこで、実習では患者様がどのような生活を送っていたのか、今後どのような生活を望んでいるかなどを聞くように意識して実習を行いました。

今回の実習で学んだことを活かし、患者様の生活復帰へのサポートができる理学療法士になりたいです。

## 学外実習を終えて

私は、福祉用具のレンタル・販売事業所で4週間実習をさせていただきました。実習では、ご自宅や施設を訪問し、福祉用具の納品やモニタリングを行いました。今回の実習では、普段の授業では見ることのできない現場の様子を間近で見ることができ、とても貴重な経験になりました。



義肢装具  
自立支援学科 3年  
澤谷 歩

現場では、利用者様やご家族、ケアマネージャーの方々とのお話の中から、利用者様の生活状況を読み取らなくてはなりません。そのため、学内の製作実習とは異なり、コミュニケーションの重要性を強く感じました。また、実際に福祉用具を使用している姿を見て、福祉用具が利用者様の生活をどれだけ支えているのかわかることができたとともに、福祉用具を正しく選定し利用していただくことの大切さを身に染みて感じるすることができました。

今後は、福祉用具に関する知識をより深く、QOLサポーターの一員として役立てるように頑張りたいです。

## 8週間の臨床実習を終えて

私は、4年生の前期に愛知県の八千代病院にて8週間の臨床実習をさせていただきました。実習では、一人の患者様を担当させていただき、作業療法士の先生から手厚い指導を受けながら、評価から治療までを行いました。私の担当させていただいた患者様は、回復期病棟に入院されていて、退院を目標としていました。そのため、退院後不自由なく日常生活を送ることができるよう、患者様やご家族から病前の生活や家屋環境、その他様々な生活面での希望を伺い、多職種との情報交換を行いながら日常生活訓練等に結びました。訓練を重ねることに患者様が自身でできることが増えていき、嬉しそうな表情を浮かべる姿を見て、作業療法士として患者様の手助けが出来たことに喜びを感じました。



作業療法学科 4年  
平井 香

今後、臨床の現場で働くにあたり、患者様やご家族、多職種との関わりを大切にしながら、今回の実習で学んだ知識や技術を活かせるよう頑張りたいと思っております。

## ダブルライセンス取得者として働くこと

本学科は、臨床工学技士と臨床検査技師の2つの国家資格を取得し、幅広い領域で活躍できる医療技術者を目指す学科のため、工学と検査の両方の部門の病院実習を行いました。



臨床技術学科 4年  
野澤 昂朗

学内での実習と違い、実際の患者様と接し、病院で働くスタッフの方々に実践的な指導していただいたことは、私にとって素晴らしい経験となりました。

また、2つの国家資格の勉強をしているため、その強みを活かして実習に取り組むことができました。例えば、工学部門の実習では、患者様の治療に携わる中で、その検査データを読みとるという検査部門の知識が大変役立ちました。



臨床工学技士と臨床検査技師は、病院での役割は違いますが、患者様の治療のために必要な知識であることは同じです。ダブルライセンス取得者として働くということに可能性を感じた実習でした。

## 実習を通して学んだチーム医療

視能訓練士は医師の指示のもと視能矯正および訓練を行います。中でも、ただ指示された検査を行うのではなく、疾患に合わせて眼科医の先生が求める再現性の高いデータを取るよう心掛けることが大切であると今回の見学実習で学びました。

視力検査の見学では、視能訓練士の方が、患者様の年齢や理解度に応じて、検査方法や使用する器具を臨機応変に使い分けていました。これにより、スピーディーかつ、患者様への負担が少ない検査を可能にしています。また、学内の実習だけでは学べない検査方法の工夫や接遇、場面に応じた対応の仕方を学ぶことが出来ました。そして、視能訓練士・看護師・眼科医の皆様が、患者様のためにより良い検査や治療を目指し、密接に連携して仕事をしていると実感しました。

今回の実習を通して学んだことを、学内での実習や授業に活かしていきたいです。



視機能科学科 2年  
古見 由莉香

## QOL向上を目指した看護

学外実習を通じて、患者様の身の回り全てをお手伝いするのではなく、患者様が出来る部分を活かしつつ、できないところをサポートすることが大切であり、そしてそれを行うにはコミュニケーションがとても重要だと学びました。

患者様は一人ひとり疾患や性格が異なります。そのため、より良い看護に近づけるためには、その人に合った看護を行うことが必要となります。しかし、そのためには患者様との関わりの中で、生活や性格を見ていかなければ、患者様自身を理解していくことができないと感じました。

また、患者様の強みを理解し、残存機能を活かした看護を行うことで、患者様の活動の幅を広げていくことができ、結果的にQOLの向上に繋がれることも実感することができました。

今後の実習でも、患者様との関わりを大切に、「患者様のQOL向上を目指した看護」を提供できるよう取り組んでいきたいです。



看護学科 3年  
遠藤 玲奈

## 「人との繋がり」の重要性

保健所実習では、乳児健診(4ヶ月児)や3歳児健診で実施されている栄養指導の見学、「国民健康・栄養調査」「県民健康・栄養実態調査」の模擬体験、各研修会の見学、事前課題で作成した「減塩指導媒体」を用いた栄養指導の実施など、5日間という短い期間の中で様々な実習に取り組ませていただきました。

実習を通して最も強く感じたのは、「人との繋がり」が非常に重要だということです。保健所では、多くの健康な方々を対象とするため、幅広くサポートする態勢が必要です。だからこそ、他の専門職と「連携する」ことだけではなく、地域の方との「繋がり」も大切にし、強化することで、地域間での助け合いや相互で協力し合う関係を構築できます。そして、結果的にその集団の健康の質の維持・向上にもプラスに繋がっていくのだということを実習で学ぶことができました。



健康栄養学科 3年  
片野 佑美

## 介護実習・相談援助実習で学んだこと

私の実習体験は、1年生の夏休みのデイサービスでの介護実習から始まりました。2年生では特別養護老人ホームでの介護実習、3年生では障害者就労継続支援施設での相談援助実習をさせていただきました。社会福祉士と介護福祉士の両方の資格取得を目指すコースは、実習期間が長く最初は大変でしたが、学内では学ぶことができないことを体験できて有意義な経験をすることができました。例えば、認知症の人には寄り添うことが大切だと授業で習っていましたが、実際にどのように寄り添うのかは一人ひとり方法が異なります。現場では、利用者様とともに行動してきめ細かく観察しながら必要な対応方法を考え実践していました。そして、職員の皆様の指導のもと体験する中で、利用者様とリズムを合わせることが寄り添いのひとつだと学びました。

今後は、実習で学んだことをより深めるため、学外のボランティアなどにも参加して視野を広げていきたいと思っています。



社会福祉学科 3年  
鈴木 悠大

## インターンシップで学んだこと

私は、夏休み期間に、運動指導、体力測定などを通して人々の健康づくりに貢献している新潟市の企業でインターンシップ実習を行いました。

実習では、指導場面の見学だけでなく、ストレッチやエアロビクス・筋力トレーニングなどを利用者様と一緒に体験しながら指導法を学ぶ機会が何度もありました。

インターンシップを通じて、何よりも利用者様が楽しく、安全に運動できるよう指導することが大切であることや、そのためには運動強度を調節するだけでなく、コミュニケーションを図らなければならないことなどを、少しずつ理解できるようになりました。また、利用者様と交流する中で、指導者としての必要な知識は運動指導に関するものだけではなく、心のケアなど多面的な知識が必要であることに気がつくしました。

私は将来、健康運動指導士として働くことを目指していますが、今回の実習で学んだことを活かせるように頑張っていきたいです。



健康スポーツ学科 3年  
山西 真由

## 相手を思いやる気持ちを持つ

私は、今回の実習で「診療情報管理士」だけでなく、「医師事務作業補助者」の業務も体験させていただきました。

主な実習としては、「患者様の診断名のコード化」「カルテの編綴作業」を行いました。この業務を実際の現場で行うことで、私が目指す職業が、今後の病院にとって必要とされる大切な仕事だと、改めて実感することが出来ました。しかし、授業で習った通りではない現場の業務に、自分の知識不足も感じ、まだまだ学ぶことがたくさんあると身が引き締まりました。

そして、今回の実習を終えて、「相手への思いやり」の大切さを学びました。私に関わってくださった医療スタッフの方々は、どの方も思いやりを持って業務につかれています。丁寧にわかりやすく教えてくださいました。私も相手を思いやる気持ちを持って、業務に励むことのできる診療情報管理士を目指したいと思います。



医療情報管理学科 3年  
田村 梨紗

# 「第15回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告

実行委員：健康栄養学科

新潟医療福祉学会は、本学が設立されると同時に、本学を中心とした新潟県内の健康と医療福祉に関わる職業を専攻されている人たちの研鑽の場として立ち上げられました。また、個々の職能者のみを対象とする学会ではなく、健康と医療と福祉に関連したすべての職種の人たちを対象とした幅広い職能者が集う貴重な機会として、情報交換しながら、「チーム医療」を実感できる場にもなっています。

今年度は、10月31日(土)本学キャンパスを会場として、一般演題68題(口演発表5題、ポスター発表63題)、特別講演およびシンポジウムを含め、全部で73題の発表が行われ、発表後には、会頭賞・奨励賞の表彰が行われました。

## テーマ

「在宅医療における多職種連携と次世代教育～食と命の“最良の結び方”を考える～」

## 特別講演

### 在宅医療を支える多職種連携とスタッフ教育 ～当院での呼吸ケア&栄養サポートチーム活動から見てきたこと～

講師：坂井 邦彦(社会医療法人新潟臨港保健会新潟臨港病院 内科部長)

慢性呼吸器疾患患者に対する呼吸ケアと栄養サポートチーム活動を例に在宅医療を支える多職種連携とスタッフ教育について紹介する。

座長：斎藤 トシ子(新潟医療福祉大学 健康栄養学科 学科長)

## シンポジウム

### 《“喫食者にとっての最適な食事の実現”に向けての多職種連携》

座長：稲村 雪子

健康栄養学科 教授 / 公益社団法人新潟県栄養士会 会長

#### 「効果的な在宅訪問栄養食事指導を目指して」

牧野 令子

(公益社団法人新潟県栄養士会栄養ケア・ステーション 管理栄養士)

食に関わる者として、どのようなカードを切ることができるか。多職種連携支援の一員として、どのような役割を果たすことができるか、この機会に未来に向けた最適な食事の実現に向けたヒントを少しでも掴むための手がかりを見つめたいと考える。

#### 「食事を「おいしく」食べるには～唾液、味覚の重要性」

伊藤 加代子

(新潟大学歯学総合病院口腔リハビリテーション科 歯科医師)

唾液の機能・分泌低下をもたらす原因・分泌を促進する方法や、味覚障害の原因および治療方法、口腔ケアの方法を紹介するとともに、「喫食者にとっての最適な食事」を実現するのに必要な口腔環境を整えるための連携について考えていきたいと考える。

#### 「多職種連携の現状と課題について」

藤塚 寛行

(医療法人恒人会在宅介護支援センター女池南風苑 社会福祉士及び介護支援専門員)

多様なニーズを持った利用者が、質の高い生活を送るには分野を超えた途切れないケアを提供する必要がある。食に関する多職種連携の現状と課題について考える。

#### 「訪問看護師が在宅ケアチームでできること」

松井 美嘉子

(公益社団法人新潟県看護協会訪問看護ステーションにいがた 訪問看護認定看護師)

訪問看護においては療養者の食事内容や嚥下状態を観察する機会が少なく、総合的に評価するには介護職との情報交換と連携が不可欠である。このような課題を解決すべく、訪問看護師の立場から、多職種連携でできる最善の支援を考える。

#### 口頭発表



▶午前では、一般演題の口演発表およびポスター発表が行われ、いずれの会場でも活発な議論が行われました。

#### ポスター発表



#### 特別講演



▶午後の特別講演・シンポジウムでは、在宅医療における現在の取組みや目指すべき方向性、生じてくる課題等について、各職種の先生方にそれぞれの立場でご発表いただき、フロアも交え積極的な議論が行われました。

#### 企業展示



皆さまのご支援とご理解のもと、正会員93名、準会員・非会員152名、合計245名の方々にご参加をいただきました。また、出展企業等7社、広告掲載企業等28社、協賛企業等25社にもご協力・ご支援いただきました。皆様のご協力により、盛会のうちに今回の学術集会を終えることができました。改めて心よりお礼を申し上げます。次回の第16回新潟医療福祉学会学術集会は、2016年10月に開催される予定です。来年度も多数のご参加をお待ち申し上げます。



# 大学院生研究紹介

小泉 裕昭さん 保健学専攻 作業療法学分野1年

## 〔筋の機能特性-筋電図学的検討〕

私は、本学作業療法学科を卒業後、手の外傷疾患を患った患者様が多く来られる整形外科病院に勤務し7年になります。現在は臨床業務の傍ら、本学大学院の作業療法学分野で研究活動にも打ち込み、より充実した生活を送っています。研究活動に踏み込んだ理由は、難治例に対して少しでも科学的な知見で治療できる能力を身に付けたいと思ったからです。

近年では、傷害を受けた手の機能は、手の外科手術やハンドセラピの進歩によってある程度回復させることが可能になって来てはいますが、損傷程度が重度である場合には正常な機能を獲得することが困難です。なかでも神経損傷や筋腱組織の欠損などで非回復性の機能障害がある場合には、他の筋肉や腱を代用して機能を再建す



る手術が行われます。しかし、この再建術や術後セラピを実施したとしても、決して実際の生活で使用できる実用的な手になるとは限りません。これまで、この問題解決のために多くの基礎研究や臨床研究が



行われ、より有効な手法が検討されて来ましたが、これまでの筋の特性に関する研究は屍体を使用した解剖学的な調査がほとんどで、生体内の特性を調べたものは少なく、臨床で活かすことが難しいのが現状です。

そこで、私は筋電図を用いて生体の筋肉の活動特性を明らかにしたいと考え、日々研究に専念しています。筋電図は筋線維が興奮する際に発生する活動電位を随意収縮時や神経を電気刺激した時、脳を刺激した時に導出する手法ですが、まだまだ研究の入口に入ったばかりで理解困難なこともあります。しかし、この研究を進めていけば治療方針の選択や手術後のセラピの一助になるのではないかと考え取り組んでいます。また、大学院では素晴らしい先生方や大学院生の仲間に出会うことができ、日々成長している自分を実感しています。今後も自分の研究が臨床で役に立つ日が来ることを願い、精一杯取り組んでいきたいです。

熊谷 順子さん 保健学専攻 医療技術安全管理学分野1年

## 〔臨床検査と医療技術安全に関する研究〕

現在私は、本学臨床技術学科に助手として勤務していますが、今年4月、本学大学院修士課程に医療技術安全管理学分野が新設されることを知り入学しました。入学の動機は、今まで論文作成をする機会がなく、本大学院であれば論文の作成ができると思ったからです。また、幸い指導教授が私の上司だったことも入学の決め手となりました。そして、全く新しい分野で「臨床検査と医療技術安全に関する研究」に着手することを決め、研究に取り組んでいます。

臨床検査は、国内の医療現場の中で、いち早くシステム化が行われた分野です。しかし、医療技術安全面における研究は、他の分野に比べかなり遅れていることも事実です。合理化され精度管理の行き届いた臨床検査部門ですが、「検査前手順」については未だ研究が不十分です。

検査前手順は検体検査、生理検査、その他の生体検査を開始する以前の被検条件の設定とも言え、これが医療安全に繋がる大きな要因です。検体が採取してから検査が行われるまでの間に、検体にはどのような変化が生じているのかを解明することは、正しい

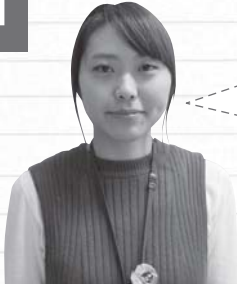
検査データを報告する上で非常に重要であると考えます。検査の精度管理を厳しく行っても、検査前手順が管理されなければ報告された検査データは被検者の生体情報を反映していないことになります。実際、研究に着手してみると、実態調査、研究課題、研究方法、国際標準との照合など、課題が山積しているのが現状です。

最近の研究活動の中では、日頃の授業の他に客員教授によるグローバルな研究紹介があり、そこで自分の研究を国際標準に照合させながら探求できることが非常に勉強になります。そしてこれからは、医療安全に関わる学会・研修会・講習会等にも積極的に参加し、論文を完成させたいと考えています。



卒業生  
レポート  
FileNo  
**01**

## ふだんの暮らしを しあわせに



社会福祉法人  
新発田市社会福祉協議会  
【社会福祉士】  
**石山 仁奈子**さん  
新潟県 新潟商業高校出身  
社会福祉学科  
平成22年3月卒業

### ➡ 現在の仕事の内容について教えてください

私は現在、新発田市社会福祉協議会の地域福祉課の主事として地域福祉業務を行っています。業務の内容は多岐にわたり、日々地域福祉の奥深さを感じています。

大学卒業後は、当会が運営している通所介護施設に相談員兼介護員として従事し、今年7月より現職に就きました。以前の現場業務では、利用者様やご家族との日々のふれ合いの大切さや喜び、介護業務の厳しさを学びました。そして、現在は地域全体の福祉を考えて、地域福祉の必要性やあり方などを常に意識しながら業務についています。現場業務と現在の仕事では、福祉への関わり方は違いますが、地域の皆様がより良い暮らしをするためのお力添えという点では共通しています。“ふだんの暮らしをしあわせに”という当会の目指すところを常に頭に置き、今後も頑張っていきたいと思っています。



### ➡ 本学を一言で表すとしたら何になりますか？

- 一言「輝き」
- その理由

大学生生活を振り返るとキラキラ輝くダイヤモンドの宝庫だと感じます。私の同窓生も福祉分野で働いている方が多く、ダイヤモンドのようにキラキラ輝いています。

まだ見ぬ輝きをどのように磨くかは、自分次第です。

### ➡ これから社会福祉士を目指す高校生や在学生へメッセージをお願いします。

この高齢社会の中で、今後益々必要とされるであろう福祉系の資格は、まさに福祉分野の誇れる専門職です。現場業務は福祉を必要とされている方に寄り添いながら、当会業務はその福祉の気持ちを地域全体に広げるように日々業務を行っています。どんな職場においても、どのような福祉を目指すのか根本の考えは変わりません。大学で育んだ福祉の精神をぜひ一緒に地域に広げていきましょう。

卒業生  
レポート  
FileNo  
**02**

## お客様の笑顔が やりがいに繋がります。



株式会社 第四銀行  
【エリア総合職】  
**望月 みなみ**さん  
新潟県 柏崎高校出身  
健康スポーツ学科  
平成26年3月卒業

### ➡ 現在の仕事の内容について教えてください

私は、本学の健康スポーツ学科を卒業後、第四銀行に入社し、為替担当、預金担当を経て、現在は窓口テラーとして働いています。学んできた専門分野とは異なりますが、地元の幅広い年代の方々と触れ合うことのできる銀行がとても魅力的に感じ、就職先として選びました。

窓口テラーの仕事は一見華やかに見えますが、事務処理などの業務中心で、間違いないよう細かなところまで気をつけなければなりません。また、金融業界は法律や税金等の変更・改訂が頻繁に行われるので、その都度勉強しなければならないことも多々あります。しかし、お客様に私の名前を覚えていただき、私をご提案した商品を購入(加入)していただいた時には、銀行員としての大きな充実感を感じます。

今後も、お客様により喜んでいただけるようなサービスを提供していくことが私の目標です。

### ➡ 本学での学びは、現在の仕事にどう活かされていますか。

大学では、人前に出て話すという経験を多くさせていただきました。例えば、私は教職課程を履修しており、その授業では、自分で作成した指導案をもとに模擬授業を行いました。生徒一人ひとりに合わせた指導をすることの難しさ、臨機応変に現場の状況に対応することの大変さを感じたのを覚えています。そしてこの経験は、職場でお客様のニーズを察知してサービスの提供や商品のご案内をする際に活かされていると感じています。

### ➡ 本学を一言で表すとしたら何になりますか？

- 一言「輪」
- その理由

他の医療・福祉系の大学に比べ、他学科の学生との交流の場が多いと思います。連携教育はもちろんのこと、課外活動や部活動で他学科の学生と関わることで、各学科の専門性を理解することができました。

この経験は、様々な専門職が集まる医療現場だけでなく、一般企業への就職にも役立っていると感じています。

### ➡ 高校生や在学生へメッセージをお願いします。

本学科では、スポーツ関連の資格取得ができるだけでなく、授業で学んだ知識を実践できる場が多くあります。また、就職のサポート体制として、先生方だけでなく就職センターの方々からの手厚い支援の下で就職活動を行うことができるため、学生への支援や環境が整っている大学だと思います。単純にスポーツが好き！というだけでもいいと思います。4年間で本学でしかできない多くの経験をして、あなたの未来を探してみてください。

旬なニュースをお届け!

# CAMPUS NEWS

## 本学教員監修による 「今こそ知りたい 新潟の介護」 が出版されました。

本学社会福祉学科の岡田 史教授と、言語聴覚学科 今村 徹教授ら監修による「今こそ知りたい 新潟の介護」(新潟日報事業社)が出版されました。

本書では、超高齢社会の今だからこそ、高齢者自身や見守る家族が安心して生活していくために、「知る」「相談する」「頼る」をキーワードに、各種サービスや保険・保障制度の基本を徹底ガイドしています。

分かりやすいイラストを用いて、介護保険サービスの種類や利用方法、認知症についての基本的な知識を中心に掲載しており、介護が必要だと思ったときのガイドラインにもなる内容となっています。ぜひ一度お手に取ってご覧ください。



## 新 理学療法学科 小林 量作教授が考案!

本学理学療法学科の小林 量作教授が、地域の高齢者の健康増進とロコモ予防の普及を目的として、新潟弁を使用したラジオ体操を考案しました。方言を使用することで地域の高齢者が参加しやすくなり、今後ますます重要性が増していくロコモ予防の普及に高い効果が期待できます。

標準語:良い姿勢をとりましょう!!

→ 新潟弁: ばかいい姿勢をとりましようてえ

標準語:息をいっぱい吐きましょう!!

→ 新潟弁: えきこといっぺきましようて

今後は、同ラジオ体操をDVD化し、高齢者施設や教育機関での普及促進を検討しています。また、「楽しく運動する!」という習慣化の一翼を担うべく、「新潟弁でラジオ体操」を普及いたしたく考えておりますので、ぜひご使用ください。



▶【新潟弁 ラジオ体操第1】の音源のダウンロードはこちら  
[http://www.nuhw.ac.jp/files/radio\\_01.mp3](http://www.nuhw.ac.jp/files/radio_01.mp3)

## 新 新潟市社会福祉協議会・新潟医療福祉大学 包括連携協定を締結! ～政令指定都市社会福祉協議会との協定締結は、医療福祉系大学では全国初!!～

本学と社会福祉法人新潟市社会福祉協議会は、新潟市内外で保健・医療・福祉・スポーツ等の分野において活躍できる学生の人材育成や災害支援の連携強化に向けて、包括連携協定を締結しました。

この包括連携協定を通じて、新潟県の人口の3分の1を占める政令指定都市「新潟市」の地域福祉の発展および地域社会を担う人材育成や学卒者の地元定着率の向上の促進を図り、地域創生に寄与していきます。



新潟医療福祉大学の  
スポーツが熱い!!

# NUHW SPORTS NEWS

## 第 63回 バレーボール 選手権大会 初優勝!

10月31日(土)～11月1日(日)に、新湊アイシン軽金属スポーツセンターにて行われた「第63回秋季北信越大学バレーボール選手権大会」において女子バレーボール部が初優勝し、強化指定クラブとして創設3年目で目標の一つである「北信越優勝」を達成することができました。この優勝は、卒業生を含め所属していた選手たち全員の頑張り、そして日頃ご支援ご協力して下さる大学関係者や応援して下さる皆様のおかげです。今後も更なる高みを目指し、精進してまいりますので応援よろしくをお願いします。



## 全 日本インカレベスト16進出達成! 男子・女子バスケットボール部

本学強化指定クラブ男子バスケットボール部および女子バスケットボール部が「第67回全日本大学バスケットボール選手権大会(全日本インカレ)」にて男女ともに初戦を突破し、念願のベスト16進出という快挙を達成しました。男女アベックでのインカレ出場は、3年連続となります。これからも日々邁進してまいりますので、今後の活躍にぜひご期待ください。



# 伍桃祭を終えて

## 第15回伍桃祭(大学祭)開催報告

今年は伍桃祭を通して全11学科をひとつにしたいという願いを含め、「Tutti」というテーマで開催しました。「Tutti」は、イタリア語で「全奏・オーケストラ」という意味があり、オーケストラのように全員で一つのことを成し遂げるにはピッタリの言葉です。今回の伍桃祭を通して、実行委員だけでなく、たくさんの方々からご協力をいただきました。ステージでパフォーマンスを披露してくれたクラブ・サークルの皆さんや出店を企画してくれた学生の皆さん、事務局の方々など、本当にたくさんの方々のご協力のもとで伍桃祭を開催できました。色々な意味で「ひとつ」になった伍桃祭だったと感じています。

当日は、4組のよしもとの芸人さんを迎えてライブを開催し、過去最高の来場者数を記録しました。ライブが始まるやいなや、笑いが沸き上

がり、笑顔になった来場者の皆さんを見て、これまでにない充実感を得ることができました。

二日目は天候に恵まれず、盛況だった模擬店を開催できなくなるという事態に見舞われ、運営本部としても苦渋の決断をすることとなりましたが、来場者の皆さんが笑顔で帰る姿を見て、ここまでやってきて本当によかったと感じました。これはきっと私だけでなく、運営委員全員が感じたことではないかと思います。

最後になりますが、無事に伍桃祭を終えることができたのも、地域の方々やご協賛いただいた企業様をはじめ、教職員の方々や参加してくれた学生の皆さんなど、多くの方々にご協力いただいたおかげです。そして、一緒に企画・運営してくれた学友会・伍桃祭実行委員に感謝します。ありがとうございました。

第15回伍桃祭実行委員長兼学友会副会長 小山 龍一郎



# 受験生のみなさんへ

## 春のオープンキャンパス 3月19日(土)

新3・2年生に向けて、「大学・入学説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「体験プログラム」など様々なプログラムをご用意しています。また、保健・医療・福祉・スポーツ分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報が満載の「進学総合ガイダンス」など、春のオープンキャンパス限定のプログラムも計画しています。どうぞお気軽にご参加ください。



## 一般入試(前期日程・後期日程)ご案内

### ■入学選考試験日程

試験区分	出願期間	試験日
前期日程	1/6(水)~1/21(木) [消印有効]	2/5(金)
後期日程	2/10(水)~2/24(水) [消印有効]	3/8(火)

**「インターネット出願」で  
簡単!便利!お得!に受験**

インターネット出願なら、

**1出願につき3,000円割引!**

「併願」や「複数学科受験」を考えている方はネット出願が断然お得!

### ■入試のポイント

- 前期日程では、特待生制度で最大4年間の授業料が全額免除。
- 「第2志願制度」の活用により、一度の出願で第2希望学科まで志願可能。  
※「理学療法学科」「臨床技術学科」「看護学科」を第2志願とすることはできません
- 前期日程では全国8都市、後期日程では全国5都市に試験会場を設置。  
(前期日程:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡・仙台)  
(後期日程:新潟・東京・郡山・長野・鶴岡)
- センター試験利用入試との「併願」が可能。
- 後期日程では、英語・国語の「2科目」で受験可能。

### ■募集人員

学科	前期日程	後期日程
理学療法学科	38名	12名
作業療法学科	14名	2名
言語聴覚学科	16名	2名
義肢装具自立支援学科	13名	2名
臨床技術学科	39名	4名
視機能科学科	13名	2名
健康栄養学科	15名	2名
健康スポーツ学科	45名	5名
看護学科	35名	2名
社会福祉学科	35名	3名
医療情報管理学科	18名	2名
計	281名	38名



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地  
TEL 025-257-4455(代) FAX 025-257-4456  
URL <http://www.nuhw.ac.jp/>  
携帯サイト <http://www.nuhw.ac.jp/m/>  
【入試事務局】TEL 025-257-4459  
E-mail [nyuusi@nuhw.ac.jp](mailto:nyuusi@nuhw.ac.jp)

誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっていきます。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポート)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。

